

ユニット構成およびユニット内における空間計画特性
地域密着型特別養護老人ホームにおける建築計画特性

その1

正会員 ○毛利 志保 *
同 加藤 彰一 **
同 原 玲子 ***
同 チャン シンキー ****

地域密着型特別養護老人ホーム ユニットケア 平面分析
ユニット構成 運営状況 共同生活室

1. はじめに

2006年に制度化された地域密着型特別養護老人ホーム(以下、地域密着型)は、小規模(定員29名以下)で市町村管轄であることから、現在は都道府県管轄である広域型特養よりも新設数が増え、2006年の制度化以降約300施設が開設している(2009年現在・図1)。

しかし、段階的空間構成を意図した計画である広域型特養に比べユニット数が少ない地域密着型では、段階的構成は形成されにくいことが推察される。そこで本研究では、段階的空間構成ごとに広域型特養と比較しながら、地域密着型における空間計画の特性を探る事を目的とする。

本報では施設概要およびユニット内空間を対象とし、次報ではユニット外空間と事業所外空間に着目する。

2. 調査概要

表1に調査概要、図2に対象とした地域密着型の開設年を示す。調査は、平面図の収集およびアンケートにより実施した。調査対象施設は、地域密着型が2006~2011年開設の74施設、比較対象として制度化以降3年が経過した広域型特養65施設*1を選定した。

3. 調査結果

3-1. 調査施設の概要

施設内のユニット数を比較したものを図3に示す。広域型では、偶数ユニットの割合が8割以上であったが、地域密着型では逆に8割弱が3ユニットでの構成であった。また、基準階におけるユニット数(図4)をみると、夜勤体制を念頭に置いた偶数ユニット構成が75%を占める広域型特養と同様に、地域密着型でも2ユニット構成の施設が約60%を占めたが、その多くが3ユニット構成であることから、1ユニットはフロア単独となることが推察された。

3-2. ユニット構成と運営状況の関わり

職員配置単位をみると(図5)、ユニット単位でシフトを組む施設割合は広域型特養が55%であるのに対し、地域密着型は64%であった。また、2ユニット単位でのシフトを組む施設割合は広域型特養が地域密着型よりも15%多く、1フロアのユニット構成が職員配置に及ぼす影響が考えられた。

こうしたことから、入居者対介護職員比率においても地域密着型は広域型よりも手厚くなることが予想される。図6では、9割以上の施設で2:1以上の介護職員を配置しており(平均1.5:1)、広域型特養(平均2.3:1)に比べ手

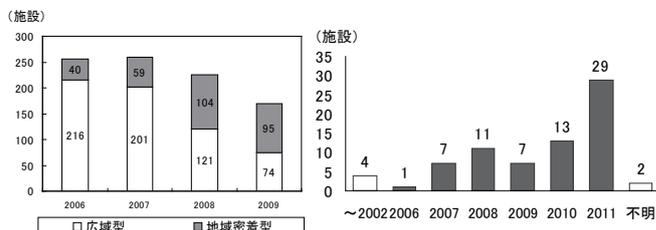


図1 地域密着型特養の制度化以降の開設施設数

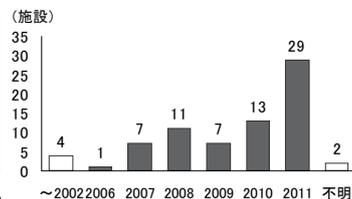


図2 地域密着型特養の開設年

表1 調査概要

調査方法	平面図収集および職員配置に関するアンケート	
回収/配布数	84/601施設(回収率13.6%)うち、分析対象74施設	
実施期間	2011年10月~11月	
調査対象施設	広域型特養	地域密着型特養
施設数(ユニット数)	65施設(515)	74施設(208) 単独型: 47 サテライト型: 21
制度開始年	2003年	2006年

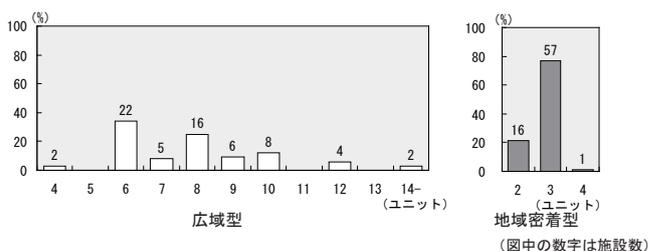


図3 ユニット数別施設数の分布

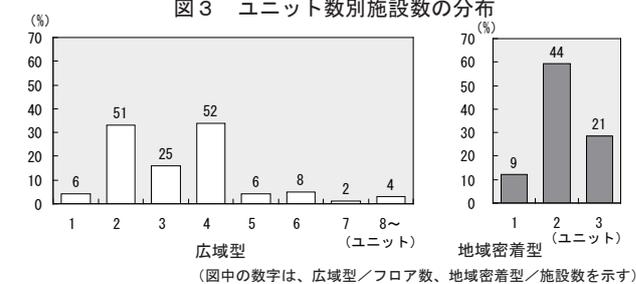


図4 基準階におけるユニット数別分布

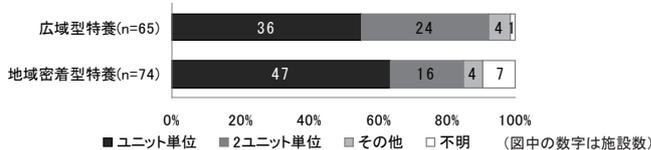


図5 職員配置単位

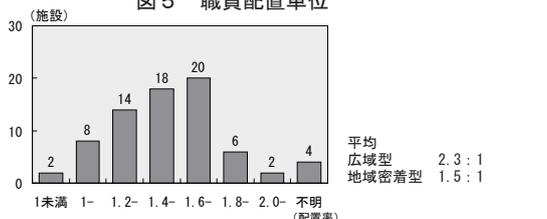


図6 地域密着型特養の入居者対介護職員比率の施設数分布

Analysis of the Plan in a Unit space and Construction of a Unit
-A Study on Planning of a Community-based daily life care for elderly (no.1)-

MORI Shiho, Kato Akikazu, HARA Reiko, CHAN Seng Kee

厚くなっている。

3-3. ユニット内における共同生活室と居室の関係

図7は、ユニット型特養における共同生活室（以下、LD）と居室の関係について、LDの独立性に基づいて分類したうえでそのユニット数の割合を示したものである。

LDの独立性の高低による分類については、広域型特養・地域密着型とも概ね似た傾向を示したが、7種類の細分類を見ると、地域密着型では「中廊下+LD」が広域型特養よりも多く、「片廊下+LD」の割合が低い結果となった。

このことは、地域密着型特養における設置基準の緩和*2によって面積が縮小でき*3、それによって建設コストを下げる配慮が要因の一つであると推察されるとともに、動線を短縮することや、ユニット数が少ないがゆえに建築面積が小さく敷地を有効に利用しようとする意図が汲み取れる。

図8は、LD空間を取り巻く壁（または窓）の状況についての分類の考え方を示したものである。「3方向壁窓」のように多くの壁窓に囲まれている空間ほど、独立性が高く落ち着いた空間であると仮定し、分析を進める。

図9に、地域密着型と広域型特養におけるLDの囲まれ度を示す。地域密着型では、「3方向壁窓」「0方向壁窓」の割合が高い。そこで、LDと居室の関係類型別にLDの囲まれ度をみると（図10）、独立型においては広域型特養よりもLDの壁窓による囲まれ度が高いユニットが多くなっている一方で、共用型では逆の傾向が見られた。

更に、7種類の細分類別にLDの囲まれ度をみると（図11）、共用型の「幅広片廊下」のみ大分類と違う傾向を示したが、その他の類型においては大分類と同様の傾向を示し、地域密着型は類型間の差が顕著であった。

これらより、地域密着型は「制度化から数年が経過しその質が平均化した」*1 広域型特養に比べ、約5年が経過しても類型による差異が残されていた。

このことは、①地域密着型特養においては未だモデルが定まっていないこと、②1フロアに配置されるユニット数が少ないがゆえに敷地も狭いことが推察され、事業所の方針（ケアの効率性追求、または居住性確保）により差異が大きくなこと、が要因であろうと思われる。

	型名称	模式図	ユニット割合			
			広域型		地域密着型	
LD独立性/高	中廊下+LD		27% (137)	46% (238)	35% (73)	42% (87)
	片廊下+LD		12% (64)		4% (9)	
	複数談話空間		7% (37)		2% (5)	
LD独立性/低	L字型		28% (144)	54% (277)	29% (61)	58% (121)
	ホール		5% (24)		5% (11)	
	幅広中廊下		13% (68)		19% (39)	
	幅広片廊下		8% (41)		8% (10)	

※図中の数字はユニット数を示す。

図7 LDと居室の関係類型

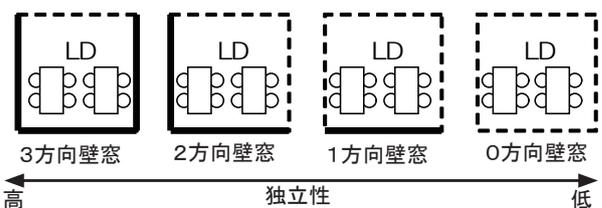
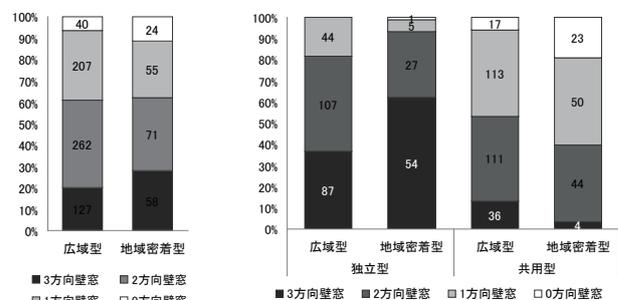


図8 LDの囲まれ度と独立性の関わり



(図中の数字はユニット数を示す。)

図9 LDにおける壁窓の囲まれ具合

図10 居室とLDの関係(大分類)別壁窓の囲まれ具合

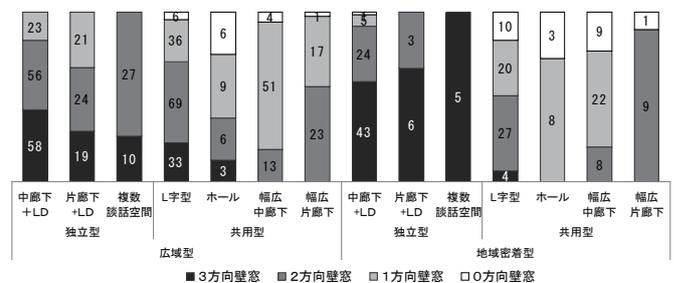


図11 居室とLDの関係(細分類)別壁窓の囲まれ具合

註)
 *1 董 恩伯、毛利 志保、谷口 元、井上由起子：制度化以降の平面計画の動向及びケア体制との関わりについて－ユニット型特別養護老人ホームの建築計画に関する研究(その1)、日本建築学会計画系論文集 75(649)、569-577、2010-03
 *2 「指定地域密着型サービスの事業の人員、設備及び運営に関する基準(平成18年厚生労働省令第三十四号)」百六十条 四による。「廊下幅1.5m以上とすること。ただし、中廊下の幅は、1.8m以上とすること。」とある。広域型と比べ、片廊下(1.8m)より中廊下(2.7m)で大幅な緩和措置がなされている。
 *3 定員一人あたりユニット内共用スペースの平均面積は、広域型特養16.0㎡、地域密着型15.5㎡である。

* 三重大学大学院工学研究科 助教・博士(工学)
 ** 三重大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)
 *** 三重大学大学院工学研究科 博士前期課程
 **** 三重大学大学院工学研究科 博士後期課程

* Assistant Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ., Dr. Eng.
 ** Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ., Dr. Eng.
 *** Graduate Student, Graduate School of Eng., Mie Univ.
 **** Graduate Student, Graduate School of Eng., Mie Univ.